

言葉との邂逅

出家とその弟子 倉田百三 新潮社

若い時には、若い心で生きて行くより無いのだ。

純な青年時代を過ごさない人は、深い老年期を持つ事も出来ないのだ。

若さを持て余す時代。

誰もが、人生において、そうした時代を過ごす。

例えば、青年期の純粹な心と、世俗の現実との矛盾。理想の自分と日常の自分の乖離。精神と肉体の背反。言葉と本心の分離。理想と野心の混同。自我の渴望感と衝動。そうした葛藤の中に、我々は、青春時代を送る。

では、その時代、我々は、何に救いを求めるか。

その問いに対し、病身、不遇、挫折、失恋といった人生の懊悩を背負いながら、二六歳の青年、倉田百三が、赤裸々な心で書き上げたのが、戯曲『出家とその弟子』であった。

この書は、明治以後の最大の宗教文学と呼ばれるほど、大正期から現在に至るまで、無数の青

年の心を捉えた作品となったが、

その中でも、胸を打つのが、冒頭の言葉であろう。

若い時代には、心の奥から湧き上がる熱い思いに突き動かされ、人は生きる。ときに、それが大きな喜びとなるが、ときに、その熱い思いゆえ、人は苦しむ。

その苦しみのさなかにある若者に向け、戯曲の中の親鸞の言葉に託し、倉田は語る。

「若い時代には、その熱い思いで生きるしかないのだ。しかし、その時代を、懸命に熱い思いで生きた人間だけが、静かな老境を得ることが出来るのだ」と。

その倉田の言葉は、誰よりも、その熱い思いに苦しむ、自身への救いの言葉ではなかったか。

その言葉が我々の心に響くのは、それが、著者自身の心の叫

びであったからであろう。

そうした魂の深奥からの言葉は、この戯曲の中で、親鸞、唯

円、善鸞の言葉として語られる。「寂しいときは、寂しがらうが、運命が、お前を育てているのだよ」

「願いと定めとを、内面的になくものは、祈りだよ」

若き日に邂逅を得た、これらの言葉。いまだ老境ではないが、心が静まりゆく時代を迎え、この倉田の言葉が、深く響く。

もとより、この倉田の作品は、二六歳の筆。そこには、人間としての未熟も、混沌もある。

しかし、なぜ、この書が、多くの人々の心を捉えて離さぬのか。そのことを考えるとき、不思議な逆説に気がつく。

やはり、多くの人々の心を捉え



た親鸞の言葉、『歎異抄』。それは、実は、弟子の唯円の書き残したものだ。同様に、道元の言葉、『正法眼蔵随聞記』。それは、弟子の懐笑の書き残したもの。

いずれも、自身の未熟を知り、嘆き、道を求め、求め、祈りを込めて書き残したものが、なぜか、多くの人々の心を打つ。

そのことに気がつくとき、我々は、一つの言葉が、実は、深い救いの言葉であることを知る。

求道、これ道なり。



田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK